〔M-014〕 MAYBE I'M AMAZED

リスナーは、『恋することのもどかしさ』という邦題から受けるイメージを頭から拭い払った上で、楽曲に耳を傾けること。さもないと、誤った印象を抱きかねない。amazed は greatly surprised （ひどく驚いた）という意味である。

TOCP-3124/TOCP-65500 の歌詞リーフレットにも間違いや感心できない点がある。まず、二番目の文。歌詞は『And Baby I'm afraid of the way I love you』ではなく、Maybe I'm afraid of the way I love you. である。そして『だからこそ きみを好きになるのが何だか恐いんだ』という対訳は誤訳と言ってよいだろう。この訳では、男が愛に尻込みしていることになってしまう。実際は、男は既に女を愛していて、その愛し方について話しているのだ。正訳見本は「僕もこんなに君を愛していることが怖いような気がする」のようになる。

次の文は『You pull me out of time　And hold me all night』ではない。私には後半は and hung me on a line と聞こえる。となると、前半も過去形の You pulled me out of time であろう。それでは、You pulled me out of time and hung me on a line. は意味を成すのか？ しかり。「調子が悪かった僕を助けて、絶好調にしてくれた」のような訳になる。

なるほど、続く *Maybe I'm amazed at the way I really need you.* （本当に君を必要としていることに、自分でもひどく驚いている気がする）で、女の助けが必要だと述べている。

なお、ここでも、そしてこの後の六箇所で、CD の歌詞リーフレットは Maybe を Baby と取り違えている。実は、私の耳によると、マッカートニーは一定のルールでこの二語の使い分けをしている。繰返し部末尾の *Baby, won't you help me to understand?* までは Baby と Maybe を交互にしているのだ。そして 2 番では四箇所とも Maybe になっている。

繰返し部の *who's in the middle of something that he doesn't really understand* （自分でも理解できないことの真っ只中）が何のことか気になる。ビートルズの新しいビジネスマネージャーであるアレン・クライン（Allen Klein）との対立と、彼を支持する他のメンバーとの友情の、板挟みのことだろうか？

思った。昔みたいに面白くはないのだ。このバンドの中にいることがとても不快だった。［中略］この歌を書いたのは、映画の中でジョンとヨーコが浮かれて叫び声を出している時だった）。

歌詞に耳を傾けると、始まりは *You've given me a wah-wah.* 。この you は誰を指すかだが、私はマッカートニー個人ではないと思う。ビートルズという仲間、特にレノンとマッカートニーではないだろうか。

続くラインは *And I'm thinking of you and all the things that we used to do.*。ALL THINGS MUST PASS（TOCP-65547）の解説リーフレット（山本安見対訳）には『きみのことばかり想ってる　きみと過ごした楽しい日々のことばかり考えてるんだ』という和訳が付いている。これは違うのではないか。楽しいことを考えていたら、頭痛など起きないはずだ。私は「今の君たちのことを考えている。そして昔一緒にやったことを思い出している」というような意味だと思う。

2 番における『ちょうどいい時に現れてね　でも今じゃ　10 セントよりお粗末な僕さ』という対訳もいただけない。私は、*Being there at the right time* の主語は *You made me such a big star* （君たちのお蔭で大スターになった）の you ではなくて、me（または us）だと読む。つまり、「僕（たち）はタイミングが良かったんだ」という意味になる。ハリソンがそう考える理由が *Cheaper than a dime* だ。10 セントより安いということは、有り余るほど存在する物ということ。そこで、このラインは「ありふれたギタリスト（バンド）だったんだから」と解釈できる。

ちなみに、この作品と関係があるわけではないが、2000 年に出版された THE BEATLES ANTHOLOGY に、次のようなマッカートニーの言葉が収録されている：There were millions of groups around at that time …（あの頃はバンドがごまんとあった）。また、PAUL McCARTNEY – MANY YEARS FROM NOW によると、ビートルズが最初のハンブルグ演奏から戻った時（1960 年 12 月）、リバプールのバンドは 300 以上に増えていたそうだ。ロンドンやマンチェスターなどの都市を加えると、マッカートニーの表現はさほど大袈裟ではない。

〔H-013〕 ALL THINGS MUST PASS

ハリソンは自叙伝 I ME MINE の中で、歌詞はティモシ・リアリ（〔Give Peace A Chance〕の項を参照）のサイケデリックな詩などからアイデアを得て書いたと述べている。そこで、1966 年に出版された PSYCHEDELIC PRAYERS AFTER THE TAO TE CHING を見てみると、第一部の五番目に All Things Pass と題した詩があった。前半は次のようだ： All things pass　A sunrise does not last all morning All things pass　A cloudburst does not last all day　All things pass　Nor a sunset all night　All things pass。

さらに興味深いことに、本の題名は、リアリが老子の“道徳教”の影響を受けたことを示している。“道徳教”をひもとくと、自然の成り行きの尊重を勧める詩が第 23 章にあった。出だしは次のよう： 希言自然　飄風不終朝　驟雨不終日 。「自然が騒ぐのは稀である　つむじ風が朝の間ずっと吹き続けることはない　夕立が一日中続くことはない」という意味だと思う。A cloudburst does not last all day （夕立が一日中続くことはない）は、まさに三番目の文の英訳のようだ。

さて、TOCP-65548 に付属の解説リーフレットに目を向けると、9 小節目からの *Seems my love is up and has left you with no warning.* を『こよなく愛した女との恋も今は終わり あの女は別れも告げずに去っていく』としているのは誤訳。正しくは、「僕の恋心は冷めて、いつしか君から離れてしまったようだ」。

2 番の同じ部分も同様だ。*After all this, my love is up and must be leaving.* の主語 my love は「僕の恋心」であって、『女』という解釈は当たらない。主語が人の場合、be 動詞に続く副詞 up の意味は「現れて」であって、「終わって」にはなり難い。

このように読むと、ハリソンは原詩の思想を、女を捨てる言い訳に利用した感じがする。捨てられた女のほうが無常を嘆くのならば、同感できるのだが。

もし自分が見捨てられたということならば、Seems her love (for me) is up and (she) has left me with no warning というような文であるべきだ。また、Seems her love (for you) is up and (she) has left you with no warning とすれば、友人を慰め

た」とよく言っていました）。寂しい時に心に響いて聞こえたのだろうか？

歌の出だしは *Mother, you had me, but I never had you.*。これを CD の歌詞リーフレットは、TOCP-3122（今野雄二対訳）にしても TOCP-70900（山本安見対訳）にしても、『ものだった』とか『ものじゃなかたった』とか、所有関係で表現しているのが気になる。私は、最初の have は「子をもうける」という意味だと考える。次の have は人間関係の存在を問題にするもの。つまり、「母さんは僕を生んだけど、母親の役割を果たしてくれなかった」というような和訳であるべきだろう。

TOCP-70900 の対訳には、2 番の前半についても文句を言いたい。レノンは『僕はあなたを見捨てなかったのに』、『あなたは僕なんか必要としなかった』という横柄だったり卑下したりするような言い方はしていない。*Father, you left me, but I never left you.　I needed you; you didn't need me.* は、相手に対して対等に話すものである。適訳は「父さんが僕を捨てたんで、僕が家出したわけじゃない」、「僕はそばに居て欲しかったのに、父さんはそうじゃなかった」のようになる。

3 番では、どちらの歌詞リーフレットも *Children* を『子供たち・子どもたち』と訳している。なぜレノンが『子供たち・子どもたち』に別れを告げなければならないのか？ なぜ自分の境遇を自分の『子供たち・子どもたち』に味わわせようとするのか？ 私の解釈では、この children は‘小泉チルドレン’と同じ用法だ。つまり、「信奉者」や「弟子」という意味の child の複数形である。具体的には、熱狂的なビートルズファンのことだろう。

〔L-005〕 HOLD ON

自分自身、パートナーのヨーコ、そして世界の人々を励ます歌。各段落で聞かれる *It's gonna be alright.*（そのうちにうまく行くよ）という言葉は、二年前の〔Revolution〕でも聞かれた。

自分自身と聞いて驚く読者もいるかもしれない。しかし、この *Hold on, John.* は誰かがレノンに命じているのではない。レノンが自分に言い聞かせているのだ。日本語では「俺、頑張らなきゃ」と言うような感じである。

〔L-015〕 POWER TO THE PEOPLE

特に、レコードのスリーブの写真に写っているレノンの出立ちが理解できた日本のファンの多くは戸惑ったかもしれない。彼は当時の日本の学生運動の闘士が着用したようなヘルメットをかぶっていたのだ。ようなと書いたのは、私は本物という印象を受けなかったからである。本物であれ模造品であれ、写真は、レノンのメッセージが「権力を民衆へ」であることを示していた。邦題の『人々に勇気を』というような生ぬるいものではない。

このナンバーを書き上げた切っ掛けは、ひと月前、1971 年 2 月に行われた RED MOLE という英国のアンダーグラウンド左翼雑誌のインタビューだったようだ。〔Give Peace A Chance〕に言及した際、レノンは That is why I would like to compose songs for the revolution now.（だから、革命のための歌を書きたいと思っています）と話していた。

それでは歌詞を読んで行こう。リフレインの *Power to the people* の後に 1 番が始まるが、最初のラインは *Say we want a revolution.*（革命を望む声を挙げろ）。冒頭に置かれた本題はインパクトがある。次のラインは、LENNON LEGEND（TOCP-51110）および WORKING CLASS HERO（TOCP-67782）の歌詞リーフレット（山本安見対訳）には『We better get on right away』と記されているが、正しくは We better get it on right away.（すぐに始めるべきだ）。そして街頭でデモ活動をするよう促している。

2 番の冒頭は、CD の歌詞リーフレットでは『Millions of workers working for nothing』となっているが、私は A million workers working for nothing. ではないかと思う。いずれにしても、「無数の労働者がただ同然で働いている」という意味である。そして重要なことは、この段落は体制側に向けて歌っていることだ。よって、続く *You better give them what they really own.* を『俺たちの本当の力を示してやるんだ』と対訳してはいけない。「君たちは、彼らが持つべきものを与えるべきだ」というような和訳でなければならない。them/they は a million workers を指す。同様に、*We got to put you down when we come into town.* も、「僕たちは街へ繰り出して、君たちを非難しなければならない」のようになる。

〔S-002〕　IT DON’T COME EASY

Got to pay your dues if you wanna sing the blues.（ブルーズを歌うには料金を払わなければならない）は傑作だ。裏を返せば、悲痛を経験すればブルーズが歌えるようになるから、そういう経験も悪いことではないという意味になる。しかも、ロックンロールと違って、ブルーズは叫んだり跳び回ったりせずに（*You don’t have to shout or leap about*）楽に演奏できると言う。実に面白い。

その *You can even play them easy.* の後のミドルの部分。*Forget about the past and all your sorrow.*（過去と悲しい気持はすべて忘れよう）と聞こえるが、Forget about the past and all your sorrows. （過去と悲しい出来事はすべて忘れよう）かもしれない。抽象名詞の sorrow よりも可算名詞複数形の sorrows のほうが、思考の流れが良いと思える。また、*The future won’t last.* に続くラインの五番目の音節の言葉が聴き取り難い。意味を考えると、It will soon be o’er tomorrow. （明日になれば終わっている）ではないだろうか。

2 番／4 番の *I don’t ask for much.* に続くラインは、I only want trust.（人から信頼されるだけでいい）だと思う。BLAST FROM YOUR PAST（CP32-5462）および RINGO （TOCP-6673）の歌詞リーフレット（どちらも吉成伸幸対訳）には『I only want your trust』と書いてあるが、私の耳にはこの your が聞こえない。

その後の『And this love of mine　Keeps growing all the time　愛する気持ちはつのるばかり』も疑問だ。愛が大きくなり続けることを厄介に感じる必要があるだろうか。私は、スターは This crop of mine keeps growing all the time. （刈り込んだ髪も伸び続ける）と歌っていると思う。これで意味が通るかどうかは、アルバム BEAUCOUPS OF BLUES のジャケット写真（1970 年夏に撮影）を見てもらいたい。スターの当時の髪形は短髪だった。

Let’s come together. と *Use a little love …* は〔Come Together〕と〔All You Need Is Love〕を意識してのラインかもしれない。

3 番の後半についても、CD 付属の歌詞リーフレットは正確とは思えない。『Peace remember peace　Is hell we make it』とは聞こえないし、これでは意味にならないのだ。私の耳に間違いがなければ、正しい歌詞は Please remember peace is how

〔M-027〕 HEART OF THE COUNTRY

邦題の『故郷のこころ』は誤訳の産物。故郷のことならば、定冠詞ではなく所有形容詞が付いて、my country のはずだし、歌詞を読めば the country の意味がすぐに分かるはず。この題名の適切な和訳は「田舎のど真ん中」。もちろん、都会に対する田園のことであり、the heart は「核心」を意味する。『人情』や『こころ』ではない。

I look high.　I look low.（あちこち見ている）に続く I look in everywhere I go. は、「どこへ行っても中を覗く」ということ。何の中なのかは、直後の *Looking for a home in the heart of the country.*（田舎のど真ん中にある家を探している）で分かる。マッカートニーは、holy（心が清らかな）という言葉で表しているが、安らかな時を過ごす隠れ家を探していたのだ。

なお、I look in everywhere I go. は、意味を考慮した上での私の聴き取りであることを明記しておかなければならない。マッカートニーの詩詞集 BLACKBIRD SINGING（Adrian Mitchell 編、2001 年 W.W. Norton & Company 刊）では、このラインは『I'm lookin' everywhere I go』になっている。私がそれを鵜呑みにしないのは、掲載歌詞を選び、その原稿を準備したのは編者であって、マッカートニー自身が歌詞の原稿をまとめ直したように思えないからだ。わずか三分の一ページの序文の中で、マッカートニーは「未発表の詩と同量の歌詞を含めたほうがいいと Adrian Mitchell に説得された。［中略］読者も同感であることを願う」という言い訳を書いている。当時の妻リンダの発案による企画だが、マッカートニーは気乗りしなかったことが、序文の長さと内容から感じられる。

2 番と 3 番を聴き比べると、ここにも〔I Saw Her Standing There〕以来のマッカートニーの作詞テクニックを見て取れる。言葉をほんの少し変えるだけでストーリーの展開を図っているのだ。細かく説明しよう。2 番は、前述 CD の歌詞リーフレット に 抜けている不定冠詞一つを補うと、*I want a horse.　I want sheep.　I wanna get me a good night sleep, living in a home in the heart of the country.*（ウマを飼おう。ヒツジも飼おう。田舎のど真ん中で暮らして、夜ぐっすり眠りたい）である。だが、3 番では I want a horse.　I got sheep.　Gonna get me a good night sleep, living in a home in the heart of the country.。これを意訳すると、「ウ

〔H-024〕 BANGLA DESH

バングラデシュ難民救済コンサートの直前、1971 年 7 月に、ハリソンは同じテーマのシングル盤を発表した。コンサートの実況録音 LP の宣伝を狙ったものだ。

イントロで *My friend came to me … before his country dies.* と言及されているのはシャンカルと考えられる。ただし、実際には、バングラデシュは彼の祖国ではない。彼はインド人である。

歌詞は、以降も単純で理解しやすい。多くの人に援助を求める趣旨の歌であるから、分かりやすく書いてあるのは当然のことである。とは言っても、正確に紙に聴き取ったものを読めばの話。残念ながら、THE BEST OF GEORGE HARRISON（TOCP-6955）の歌詞リーフレット（西川めぐみ対訳）は随所に間違いがある。

1 番。*where so many people are dying fast* の次のラインは、歌詞リーフレットには記されていないが、私の耳によると、接続詞 and で始まる。つまり、*and it sure looks like a mess*（大混乱の状況らしい）と聞こえる。これは間違いというほどのものではないが、続く『I've never seen such dispair』は明らかに間違い。正しくは、I've never seen such distress.（こんな災難は見たことがない）。mess と韻を踏む言葉を持ってきている。

その次は、歌詞リーフレットでは『I want you to lend your hand　And try to understand』になっているが、私には I ではなく now で始まるように聞こえる。また、and は聞こえない。Now won't you lend your hand?　Try to understand.（手を貸してくれないか。考えてみてくれ）だと思う。

2 番では、mess と distress が disaster（災害）に、And it sure looks が But it sure looks に、I've never seen が I've never known に、それぞれ置き換えられている。同じ言葉の繰返しを避けているわけだ。

Now please don't turn away. の後は I wanna hear you say "Relieve the people of Bangla Desh."（「バングラデシュの人々を救え」という声を上げて欲しい）。『I wanna keep you. Say』では、この文脈では意味にならない。

obviously didn't dig the words.　Imagine!（Imagine には政治性がないと思うだって？ この歌は君のような保守的な人のために砂糖をまぶせた Working Class Hero だよ。歌詞を理解してないね。想像力を働かせて読んでくれ）。二週間前の同誌に掲載されたマッカートニーのインタビュー発言への反論である。

レノンの期待どおりに歌詞をしっかりと読み返すと、1番における主張は反宗教。来世などは考えずに今を生きることを勧めている。

2 番では国家という枠組みに疑問を呈している。これがなければ戦争もないという理屈。反宗教の立場が繰り返されるのは、国家間対立や民族対立の原因は宗教対立であることが多いからだろう。例えば、当時レノンの身近で起きていた北アイルランド紛争（1960 年代～1998 年）は、支配者側のプロテスタント系（英国国教会）住民と、アイルランドへの帰属を望む、もしくは新しい統一国家を目指す、カトリック系住民との間の武力行使だった。

3 番では私有財産の存在に異議を唱えている。米国ではタブーの共産主義思想である。

レノンが豪邸に住み、他にも莫大な資産を築いていたであろうという現実からはあまりにも遊離した内容の歌詞である。しかし、*You may say I'm a dreamer.*（僕が夢を見ているだけだと思うかもしれない）と彼自身が認めるように、彼は理想に燃えていたのだ。〔All You Need Is Love〕と共通する点もあるかもしれない。

レノンの理想に無数のアメリカ人が共鳴したのは、特に 2 番の *nothing to kill or die for*（人殺しをする必要も、犠牲となって死ぬ必要もない）と *Imagine all the people living life in peace.*（人々がみな平和に暮らしているのを想像してごらん）の部分についてではなかっただろうか。ベトナム戦争（1960 年～1975 年）への米国の参戦（1962 年～1973 年）に対する国民の不満が鬱積していた時代である。

ところで、LENNON LEGEND （TOCP-51110）または WORKING CLASS HERO （TOCP-67782） 付属の歌詞リーフレットを参照する場合の注意。二回目の *I hope someday you'll join us* の後は、*and the world will be as one*（世界の人々が一つにまとまる）ではなくて、and the world will live as one （世界の人々が一つになって暮らす）である。

〔S-004〕　BACK OFF BOOGALOO

1972 年 3 月、およそ一年振りにリンゴ・スター個人のシングル盤が発売された。自作の覚えやすいメロディー、ジョージ・ハリソンによる華麗なギター演奏、前面に出た自身のドラミングが好評となり、英米で大ヒットを記録した。

作品の題名にもなっている *Back off, boogaloo.* だが、この曲をボーナスとして収録した GOODNIGHT VIENNA （TOCP-7508）付属の歌詞リーフレット（Kuni Takeuchi 対訳）の解釈は正しくない。これが踊りのブーガルーのことならば、定冠詞が付いて the boogaloo のはずである。そもそも、back off は「いじめるのをやめる」という意味であって、『しよう』ではない。つまり、この boogaloo はニックネームまたは仮名で、スターはその人間に「やめろよ」と忠告しているのだ。

その人間とは誰か？ 当時の状況、そして歌詞の中の三つのラインから、私はポール・マッカートニーだと考える。その三つのラインでは、私の解釈によると、死亡説、裸足、そして大きな目を連想させる言及がなされているからだ。スターとマッカートニーが敵対関係にあったと思わない人も少なくないかもしれない。しかし、1970 年 12 月、マッカートニーは、ビートルズという事業組織を法的に清算しようとして、残りの三人のメンバーを相手に訴訟を起こしていたのである。端的に言うと、収益金の管理をアレン・クラインに任せておきたいと思う三人と、自分の取り分である四分の一の分離を要求するマッカートニーとの対立があったのだ。

1 番は、BLAST FROM YOUR PAST （CP32-5462）の歌詞リーフレット（吉成伸幸 訳）によると、『Back off Boo-ga-loo.　What d'yer think you're gonna do　I got a flash right from the start.』。他方、TOCP-7508 のリーフレットには『Back off boogaloo what you think you're gonna do　You gotta search right from the start』と記されている。私は、Back off, boogaloo.　What (do) you think I'm gonna do?　I'm gonna flash right from the start.（おい君、やめろよ。僕がどうすると思う？ しょっぱなから、かっとなるぜ）ではないかと思う。率直に言って、最後の文については不確かであるが。

その後は、CP32-5462 では『Wake up meat head.　Don't pretend that you are dead.　Get yourself up off the cart.』。TOCP-7508 では『We don't need it don't

〔L-031〕 NEW YORK CITY

このロッカーは日記調の歌詞が面白いので、じっくりと読んでみよう。

Standing on the corner, just me and Yoko Ono, we was waiting for Jerry to land.（僕とヨーコ・オノは街角でジェリーの到着を待っていた）という出だしは、〔The Ballad Of John And Yoko〕の Standing in the dock at Southampton, trying to get to Holland or France に似せてある。Jerry とは社会活動家ジェリー・ルービン（Jerry Rubin）。レノンがニューヨークに居ると知った彼が、レノンを利用しようとして、会見を申し込んだようだ。時は、THE LIVES OF JOHN LENNON（Albert Goldman 著）によると、1971 年 6 月の短期滞在時（結果的転居の三ヵ月前）。他の図書の記述は明確でない。待ち合わせ場所はワシントン広場公園だったと同書ならびに LENNON AND McCARTNEY: TOGETHER ALONE は記している。

Up come a man with a guitar in his hand, singing "Have a marijuana if you can."（ギターを手にした男が近づいて来た。この男は「合法になったら、マリファナを吸おう」などと歌う）と描写されるのは、路上音楽家で、大麻の合法化運動をしていたデイヴィッド・ピール。洋服店に居たレノンのもとへ走ってきて、自己紹介したらしい。続く *His name was David Peel, and we found that he was real. He sang, "The Pope smokes dope every day."*（彼は本物だった。「ローマ教皇は毎日麻薬を吸うよ」と歌った）は、ワシントン広場公園で彼の演奏を聴いた時のことを述べている。

数日後、ピールが歌いながらイーストヴィレッジを練り歩くことを、レノンはルービンから聞き、ギターを抱えて参加した。この時の模様を歌ったのが *Up come a policeman. Shoved us up the street, singing, "Power to the people today!"*（警官がやって来て、「すぐに権力を民衆へ」と歌っていた僕たちを、どんどん歩けと小突いた）だ。なお、警官が単数であることから、弾圧とは考え難い。

リフレイン部にスペイン語が登場する。*¿Qué pasa, New York?* は、この文脈では質問ではなくて、挨拶。つまり、「ニューヨークの人たち、調子はどうだい？ 元気にやってるかい？」という意味。英語の What's happening? と同じである。

〔M-054〕 LITTLE LAMB DRAGONFLY

アルバム RAM 制作時に録音したものに、デニー・レインのボーカルなどをオーバーダブして完成させた作品。

初めて題名を目にすると、Dragonfly（トンボ）という名前の子ヒツジを題材にした歌ではないかという印象を受ける。しかし、実際に楽曲を聴くと、この小ヒツジとトンボの組合せは歌詞の中には出てこない。前部と後部は小ヒツジに対して歌い掛け、中間部はトンボに対して歌っている。前後部と中間部の旋律は異なり、歌詞の帰結も違う。小ヒツジとの再会には否定的（*we may never meet again*）な一方で、トンボとの間には未来の可能性を模索している（*you and I still have a way to go・we'll have a way to go・you and I can find a way to see*）。よって、この作品は二つの作品をサンドウィッチのように合体させたものと考えられる。この観点に立つならば、題名は Little Lamb / Dragonfly と理解することになる。

最初に子ヒツジの部分だが、子ヒツジは生活において困難に直面している（*life is hard*）。この life は「命」そのものかもしれない。話者は、子羊が *out* になる手伝いはできるが、*in* にはできないと言う。そして、前述のように、小ヒツジとの再会を期待できないでいる。

小ヒツジの正体、その境遇、そして話者の立場について、様々な推測や解釈が可能であろう。マッカートニーの詞にはダブル・ミーニングが少なくないので、なおさらである。しかし、私は敢えてストレートに読んでみたい。すると、次のようなストーリーが考えられる。舞台は農場。一匹の子ヒツジが瀕死の重傷を負う。話者は安楽死を施すことはできても、治癒させることはできない。話者の心が痛む。

次に、中間の部分を構成する別の歌。3 番まであり、1 番と 3 番は *Dragonfly fly by my window* で始まる。このトンボは昆虫ではありえない。多分、眼鏡を掛けた人物だろう。そして、この fly は命令形というよりも、you fly という叙述と考えるほうが、意味として落ち着く。また、トンボが窓辺を飛んでいる姿、戸口から立ち去らない（ *you hang around my door*）姿は、話者が見る幻影であることが、続く *I don't live here any more.*（僕はもうここをすみかとしていない）以降の随所で判明する。

アルバム RED ROSE SPEEDWAY 制作が始まった 1972 年 3 月に録音されたものの、結局、アルバムに収録されなかった作品がある。それが次の〔Mama's Little Girl〕。日の目を見たのは 1990 年 2 月、英国でシングル発売された〔Put It There〕の B 面に収まった時だった。現在では CD 版 WILD LIFE のボーナス曲の一つとして聴くことができる。

〔M-062〕 MAMA'S LITTLE GIRL

歌われているのは、まぎれもなく、ポールとリンダとの間に生まれた最初の子、メアリー。なぜヘザーやステラとは考えられないのかは、後述する。

歌詞は単純明快。それでも、TOCP-3126 の歌詞リーフレット（吉田縁子対訳）には聴き取り間違いと思われる箇所が二つと誤訳が一つある。まず、『You better give me some time　For what's on my mind』。私には You better give me some time for this heart of mine（僕の心の準備ができるまで少し待っておくれ）と聞こえる。もう一箇所は、最初の間奏が終わって三行目。『Looking like a rose bud』ではなくて、Growing like a rosebud （バラのつぼみのように成長している）である。

誤訳は、*Picking up a mountain* を『砂山を作って遊ぶ』としていること。この a mountain は「多量」という意味。日本語の「山ほど」という表現と同じ発想である。そして、他動詞 pick up のこの文脈における基本的な意味は、「得る」。幼い子供が多く拾い集めるもの、身に付けるものは何か？ 言葉や知識である。よって、*Picking up a mountain* は、「たくさんのことを学んでいる」というような訳であるべきなのだ。

これで、私が娘を特定した理由が読者に分かったであろう。リンダと前夫との間に生まれたヘザーは、当時、既に満九歳の少女。ステラは未だ生後半年の乳児。だが、メアリーは二歳半の幼児で、生活習慣などを学習し始めた時期にあった。

前述のように、ジョン・レノンの活動は、社会的のみならず音楽的にも 1972 年